

「シャープ・スナツフルズはいかにして資本キャピタルと妻を手に入れたか」

(後編)

ウイリアム・ギルモア・シムズ作

中村正廣 訳

9

「で俺ア其処そこさ座まつて居ゐだ。判事はんじさん、俺の見たところ俺ア無事むじだったつちや。飛んで行く雁かりの紐ひもから抜け出すことは出来たし、其処そこさ鳥達たうじん全部居ゐだった。俺の前めと頭あたまば並ならべ、時々ときどきばたつについては抜け出でそうとして居ゐる。だが巧たくまく行いかない。其処そこさ居ゐる、捕とらまったまま、サム・スナツフルズの途方とくほうも無い『資本』があつたつちや。

「それに、俺アライオンの巢穴すくから抜ぬけ出すごどが出来た、つまり、ハニートリーから抜ぬけ出し、再び生き埋くみめさされる危険けんけんは今のところ全く無なかった。熊くまコのお陰かげだ。それがら、星ほしの中なかに居ゐる聖せいなる美うつくしい精靈せいれいのお陰かげだ、なにしろ、熊くまコが蜜みつば求めて木きさやつて来て、俺おれば捕縛とらから救出きうしゅしたのも、聖靈せいれいの力ちからだから。

「んで、熊くまコはまるで眠ねって居ゐるかの様に静しずかにして居ゐだった。首くびが折やれて居ゐることは判わかって居ゐたけどな。そうだったつちや、この熊くまコも凄あい『資本』だったつけ。

「其処そこさ俺おれア座まつたまま計算けいさんばしてみ

た。夢の中さ出て来た美しい若い女子の言つた事がやつと判つた。『資本』ば手さ入れる筈だけれども、先ず艱難辛苦と、それがら命の縮む思いばしななければならぬと彼女言つたつちや。今まで『資本』の価値さ知らなかつたけれど、ホブソン様が何故俺さあんなことば言つたのか判つた。爺様が随分陰険なことば言つたことは本当だけれども。

「さて、俺ア計算さ取り掛かつた。

「寒空で俺ア寒さが身さ凍みた。暖かい服ばしつかり着込んで居たけれど、兎に角寒さの為さ眠くて眠くてしようが無かつた。疲れと恐怖のせいもあつたかも知れない。たけど眠るのは恐い。此がら先何が起るか判らないし、お天道様が見えないことには一人前の男もしつかと勇気ば見せることは出来ないもんだ。俺アいろいろ計算ばして眠気と戦つた。

「四万羽の雁が居だつた。

「正確には四万は居無い。その数字にはとても届か無い。たけど、雁達は其処さ居だつた、うじやらうじ

やら居だつた。サウスカロライナの村さ
行けば何処でも、一羽の雁さ付き四十セントがら六十セントの金が入る。

「其処さ『資本』が居だつた。

「それがら、其処さ熊コも居だつた。

「俺ば引き上げた力、そして木のあんな大きな穴ばふさいだ大きさと太りようば考えると、五百ポンドは下らないと俺ア計算ばした。この熊コの皮は二十ドルの価値があることは確かだつたつちや。それがら脂肪と獣脂もある、それに熊の骨ば煮詰めて骨髓ば取ることも出来る。皆さんが鬪鶏用さ鶏の嘴の周りの羽毛ば大きくする為さ使う、あの熊コのグリースだつちや。それがら、肉もある。只、皮ば剥ぎ、内臓ば取つたりしなくてはならないけど。四百五十ポンドば大きく下回することは無い筈だ。生肉で売つても、薫製さしても、少なくとも一ポンド十セントは儲けさなる筈だ。

「俺ア言つた、『俺の資本だぞ』

「『それがら』と俺ア続けだ、『俺のハニートリーだ。

「ここら辺りのハニートリーには大体一万ガロンの蜜が入って居る。一ガロン当たり五十セントから七十セント手さ入らないなら、フロリダには鱈が一匹も居ないと言うことになる』

「んで俺ア眠気と戦いながら、俺の『資本』とメリ・アンのことは一緒に考えながら夜の間中計算ばした。

「朝さなる前に、しなければならぬこと、拵えばならぬこと、全部計算できて居た。

「夜が明けると、俺ア直ぐしつかり目ば配って居た。「辺りには捕まえた雁と言う生き物がいっぱい居る。熊コ騒いだりすることも無く横さなつて俺のナイフばじつと待って居だつた。雁達、俺より随分疲れて居た様だつたつちや。何故と言うと、鳥達さ罠まれたこの俺が、鋤ば引ぐ紐さしがみついて木さぶらりんこして居ると言うのに、鳥達羽ば一回でもばたつかせる気力も無い様だつた。

「何よりも先ず言わならないことだけでも、判事さ

ん、夜明けの最初の印ば見て辺りば見た時、俺ア魂消たのなんの、俺の目さ何が見えたかと言うと、あの懐かしいトライオン山の大きな山頂が東さ聳え立つて居る姿だつたつちや。その向こうにはコロンプス・ミルズの家と田畑が見えだ。んで俺ア後ろば振り向いて少し南の方ば見でみると、其処には俺のみすぼらしい小さな丸太小屋が静かに、んでも煙の一筋も煙突から流れ出て居ないで立つて居るでは無いか。

「『あの素晴らしい天使の聖霊達のお陰だ』俺ア言つた、『家まで二マイルも無い』木がら降りる前に俺ア今何処さ居るのか正確に判つて居だつた。湖がら、俺がコロンプス・ミルズのラバば荷車の直ぐ側さ繋いだ処がら四マイルしか離れて居なかつた。それに俺ア其処さライフルも置いて居だつた。んでも、野生の雁達さ空中ば運ばれて居た俺ア、情けない窮地さ閉じ込められで本当にカナダの方さ千マイルばかり進んだと思つて居だつた。

「木がら降りると、俺ア直ぐ急ぎ足で

ラバと荷車ば取りにその場は離れた。戻ったら熊コと雁達が必ず手さ入ると言う確信が俺にはあったっちゃ。荷車はそのままじつとして居だった。しかし、ラバは食うものひとつ無かったがら、まもなく一口かそこら食べ物が入る言う感じで自分の鹵は大きな丸石で研いで居だった。

「俺ア荷車さラバば繋いでがら俺の蜜蜂の木の処さ連れて行き、熊コは荷車さ放り込み、そこらに居だった雁達の首は全部絞めた。逃げてしまった雁も多がつたけどな。んで、熊コの上き積み上げた雁は数えでみると、二千七百羽ばかりだったつけ。

「二千七百羽と言うのが！」法螺吹きと他の猟師達が一斉に叫んだ。「二千七百羽だと！おい、ヤオウ、この間までは今の話をする度に、何時も三千百五十と言つて居だでは無いか」

「そうだったな、若し俺がそう言ったのなら、その通りだと思う。記憶さ新しかったがら、その時は確かに間違いなかった。俺ア自分で言ったことば取り消す

様な男では無い。そうだ、お前ら、俺ア

四

最初の言葉と最初の信念ば貫ぐ。前言ば取り消す様なことは恥ずかしくて出来ない。若し俺が三千百五十と言つたのなら、それなら一羽も欠けず三千百五十羽だったっちゃ。んではこれがら全部の勘定の仕方ば教えてやるから。俺が市場さ持つて行つた雁は二千七百羽だけだったと思う。二百はコロンプス・ミルズさやつた。それがらもう二百はメリー・アンの処さ持つて行つた。それがら少なくとも五十は俺の為さ取つて置いたと思う。判事さん、数えてみて呉れ。これでよろずの精算の仕方が判る筈だ。俺が二千七百羽と言つた時、俺ア村で頭当たり五十セントで売つたものだけば勘定さ入れて居た。その金ばポケットさ入れた後、『資本』ば手さ入れたと言う思いが胸さじーんと来たんだっちゃ。

「さて、判事さん、次は熊コの番だ。獣皮と獣脂ばよい相場値で売つたっちゃ。熊コの肉ば売つて、これには一ポンド当たり十セント手さ入れた。なにしろ素

晴らしい肉だつたがらな。髓の為さ骨ば煮立で、柔らかい脂ば溶かし、それは床屋や薬屋さ十四ポンド売りさばいた。これで一ポンド当たり一ドル。獣皮は二十ドルで売った。全部現金で手さ入れたのだった。

「一羽五十セント、新鮮で生肉とくれば、時節柄グリンヴィルやスパータンバーグやアッシュヴィルの何処探しても欲しがらない家などひとつも無かつた。一等安い新鮮な肉で、おまけにどう考えても最上の肉だぞ。村々の人があの時の一週間で現し身のまま天国さ行つたとする、そしたら、復活の為さなるものば持つて行くには、雁の肉よりいいものは無かつた。凍える様な寒い日が続いて居だつたがら、獣達食い尽くされる迄毎週毎週腐ることも無く、一ヶ月は皆雁ば食つた筈だ。熊コがらだけでもまるまる百ドル位稼いだつちや。先ず、獣皮、これが二十ドル、次に、四百五十ポンドの肉が一ポンド十セントで、四十五ドル、それがら、柔らかい脂が十四ポンドで十四ドル、そして、獣脂が約六ドル加わり、煮立てた髓が十一ドル

と言う訳だ。

「さて、判事さん、計算ばして呉れ。一羽五十セントで二千七百羽と言うことは、つまり千二百五十ドルは下らないと言うことだ。但し全部売れた後の話だ。そこで俺アコロンプス・ミルズのラバと荷車ば使つて夜も昼も一所懸命にやつて、例の村々の、ありとあらゆる通りさある、ありとあらゆる家さ売り歩いた。大体千五百ドルばベッドの枕の下さしつかりしまい込んだつちや。全部中まで本物の金や銀だ。

「しかしこれでお終いじゃ無い。また俺の蜜蜂の木が残つて居だつた。俺がああ蜜ば手さ入れずに済ます積もりで居るなどと考へてはならない。本当だ、貴方。俺ア大声で騒いだりはしなかつた。俺がやる積もりで居ることば誰にも漏らしたりすることは無かつた。連中は野生の雁さついで尋ねたけども、俺ア野生の雁の猟さ連中は送り出した。熊コの肉と雁ば全部売り尽くしてがら、俺アやつとあの蜜ば手さ入れる準備さ取り掛かつたつちや。蜜蜂達はあの蜜ば百年

かけて拵こしらえたに違ちがいない、それがら熊くまコ達たちさ追おい出でさせられたと思おもう。

「コロンブス・ミルズさ訊きいてみて呉くれれ。ミルズは此このことさついでいろいと尋たねた。ミルズは何時なんじも俺おれのいい友達ともだちだったけど、俺おれアおくびにも出でさなかつた。んでもミルズはいい奴やつで、何も言いわずに俺おれさラバと荷車かまば貸かして呉くれれた。ウイスキー愛好家おほいその多いスパータンバークとグリーンヴィルさウイスキーば運こんだことのある水漏しみれのしない樽たるば、波風なみかぜ立てぬ様ように静しずかに俺おれア全部ぜんぶ買かい占しめたつちや。来る日ひも来る日ひも、俺おれア荷車かまさ載のせられるだけだけの、ラバが引ひつ張はれるだけだけの樽たるば運こんで出でで行いった。あんなでつかい古いチエスナット・オークは初はじめてだつたけども、木の底そこの近ちかくさ穴あなば開ひけ、見事みごとな糖蜜とうみつば巧たくく抜き取とつたつけ。十六日じゅうろくにち以上いじょう掛かかつて二千ガロンば少すくし上あ回る位くらいの蜜みつば手てさ入いれた。あんなに清きくて甘あまくて黄色きいろい蜜みつは誰たれも見たことことは無ない筈はずだ。蜜みつば入れる樽たるや箆へら巻き瓶びんばとても見みつけられないと思おもつた程ほどだ。一ガロン七十セントで全部ぜんぶ売うつ

つたけど、あれは大安たいあん売うりと言いうもんだ。こんな訳わけで俺おれア蜜みつがら約やく千四百ドル稼かせいだつけ。

「さで、判事はんじさん、仕事しごとさ取とつ掛かがつて居ゐだ間ま、俺おれア柄がらにも無なくメリー・アンとその父親ちちのやの旦那様だんなさまには近づかかなかつた。旦那様だんなさまには二百羽ひゃくうの雁かりば送おくつた。その中なかには生肉せいにくもあつたけども、数かずにして百羽ひゃくう、もう百は内蔵ないざうば取とつて塩しほさ漬ひけたものだつた。それがら、五ガロン入いつた蜜みつの箆へら巻き瓶びんば三本さんぽん送おくつたつけ。だけど俺おれア二人ふたりさ近づかず、何も話わさず、言いいふらすこともしなかつた。『資本しやほん』ば刈かりり入れるやり方かただけは考かんえだ。そして俺おれア实际じつじそれば刈かりり取とることが出来こ来たんだつちや。

「ラバと荷車かまば持つて村むらのコロンブス・ミルズの処ところさ帰かると、俺おれアミルズが売うりたいと言いつて居ゐだつた百六十エーカーの田畑でんはたさついで尋たねてみた。立派りっぱな家付かづきだつたちや。ミルズはそれば俺おれさ安く売うつて呉くれれた。俺おれア即金いそぎんで払はつてがら、ポケットさ権利証書けんりしやうば突つつ込んだつけ。『これで資本しやほんが入いつたぞ』

「これは永久に変わらない事実だったつちや。前の小屋がら新しい農家さ何もかも移した俺さ、コロンプスは一昨日十一クオートの乳ば出す立派な乳牛と見事な若い子牛ば呉れた。丁度その頃南の方角さあるスパータンバーグで、アシユモア家の家財道具の大セールがあつたつけ。見苦しくない寝台も、若い女の部屋さびつたしのももの一つも無かつたことば思い出した俺ア、セールさ出かけて行き、しつかりした素敵なマホガニー製の寝台ば一つ、それがら椅子ば十個ばかり、整理箆筒ばひと竿、そして、判事さん、此処ではちよつと口さ出来ないけれども、淑女の部屋には無くてはならないものも幾つか買ったつちや。そうこうする内に俺ア家ば用意万端整えだ。んで、此の時まで俺の考えて居ること、する積もりで居ることば俺ア誰にも漏らしはしなかつた。最後に俺ア玄関口さ立って辺りば見回してがら、これこそ俺の『資本』だと思つたつけ。手さ入れなければならぬものが全部手さ入ったとき、俺ア全部勘定してみた。

「テーブルさ俺ア田畑の権利証書ば広げた。万事それでいいか確かめる為さ、二度読見直した。『法的保有者』として大きな文字で俺の名が何度か書いてあつたつちや。

「次に俺ア家財道具ば据え付けだ。それがら年寄りの雌馬ば馬小屋の前の庭さ連れて行つた。馬の肋骨は今数えると言うのは出来なくなつて居た。まるで新しく自分が気に入つたかの様に、かくしゃくとして居た。

「それがら立派な新しい牛と子牛も居たつた。両方ともアザラシの様に太つて居て、それに秋の牡鹿の様に艶があるつちや。

「それがらスパータンバーグで買った素晴らしい若いラバが頭、それがら丁度いい具合に男女二人は乗せることも出来る頑丈な中古の頭立て軽装馬車もあつた。んで、俺ア大きくなった感じで、資本のある重要人物の様な気持ちだつたつちや。

「それだけでは無かつた。

「判事さん、他にぴかぴかの金もあつたつちや。みんな金と銀で、例の汚いぼろ紙幣やしみの付いた汚れた紙幣なんかでは無い。丁度あの頑固親爺のジャクソン將軍のご時世でな、將軍がニック・ビドルの会社ば潰して、腐りきった紙幣の代わりに素晴らしいベン・トン・ミント・ドロップは呉れた時代だったが、あの頃は欲しいと言えは金と銀が直ぐ手さ入つた。」

「判事さん、俺ア自分の金ばご大層に数えてみだ。金の方は、十二か二十の小さな革袋さ入れてあつて、銀貨は散弾入れの中だつたつちや。全部数え上げ正確な数字ば掴まえるのに丸一朝かかった。それながらそればポケットの中さあつちこつち至る処さ突つ込んだけども、袋ば詰め込むことが出来る処は手辺り次第と言つて訳だつちや。銀貨は鞍袋さ詰め込んで雌馬さ威勢よく乗せた。」

「それながら馬さ跨り、雌馬の鼻面ばホブソン様の農家さ向け、俺ア真一文字に進んで行つた。」

「お察しの通り、俺ア自分の『資本』で旦那様ば仰

天させる積もりで居だ。んでもその前に
八
沢山恐い思いはさせねばならない。」

「いいですか、田畑や家畜や他の物の取引ばコロンス・ミルズとした時、俺ア思い切つてメリーアンとの結婚話さついて話してみたんだ。『資本』さついてホブソン様が言つたことば俺が話すと、ミルズはこう言つたつけ、

「『あのおいぼれ鼻つまみが！自分の借金ば払えないで居てそんな大法螺ば吹くとは何と言ふことだ。俺からこの三年三百五十ドル借金したままで、俺ア利子すら貰つて居ない。奴の田畑はまるごと抵当として取つて居るから、若し野郎コがお前さ娘つコばやれな」と言ふなら、俺の処さ来ればあつと言ふ間に野郎コのネジば威勢よく巻いてやるべ』」

「俺ア言つた、『コロンス、その抵当権ば俺さ売つて呉れ』」

「『借金の額面で売つてやるべ』とミルズは言つて呉れた、『利子のことは今回は無しだ』」

「『よし、それで決まりだ』と俺ア答えた。俺が即金で払うと、ミルズは有効な対価として抵当証書署名して俺さ讓つて呉れた。

「胸のポケットさ素晴らしい書類ば入れたら、旦那様ば家から追い出すことが出来ると判つて居たが、俺アこれで旦那様と向かい合つても負けないと思つた。これア忘れてはならないけど、俺アその時途轍も無く立派な外套と新しい毛皮の帽子と言うぱりつとした身なりば拵えて居たのだつちや。鏡の中ば覗いてみた俺ア、鏡の前に一步踏み出す度にすっかり箔が付いた気持ちがつけ。メリー・アンとあの素晴らしい父様の処へ本道ば通つて向かいながら、雌馬が一步足ば踏み出す度に俺の背丈がどんどん伸びて行くのば俺ア感じたつちや。

10

「さて、判事さん、俺が旦那様の農家さ辿り着かな

い内に誰が俺の前さ現れたと思う、あのメリー・アンだつちや。四分の一マイル手前の何も生えて居ない尾根ば俺が越えた時、俺のことは見つけたに違いない。俺の可愛い娘っコはこの一週間、日曜日も勘定さ入れて十一日もの間、毎日俺のことは探して居たんだ。判事さん、山の中ではな、一週間は時に十一日、それがら十四日さなることもある。特に長い野営狩獵さ出かけて行つた時はそうだつちや。

「さて、メリー・アンは俺さ再び会えて余程嬉しいものだから、涙ばぼろぼろ流して泣いては、声ば立てて笑う始末だつちや。彼女こう言つた、

「『ああ、サム、本当会えて嬉しい。私のこと綺麗さっぱり諦めたのかと心配して居たのよ。それながら、あの黴臭い独り者のグリムステッド爺さん、殆ど毎日ここさやって来るのよ。それながら、父様は私さ爺さんと結婚させるとはつきり言ってるし、母様は私は捕まえて、あの爺さんがどんなに立派な田畑ば持って居るか、どんなに素晴らしい馬車ば持って居

るかと言ふことば、何時も言つて居た。それがら、母

様は若し私が爺さんと結婚しないと父様が私ば必ず殴ると言つて居るのよ。だけど私あんな気味つこ悪い爺さん、見ると言うのも嫌だ』

「『爺さんは呪え』と俺ア言つた、『メリー・アン、爺さんは呪つて仕舞え』

「すると彼女俺の言う通りにしたけども、声ば潜めた昔の呪い方だったつちや。

「『あの人神様さ呪われたらいいわ』と彼女は言つた。それがらもつと大きな声で、『そして若し私が貴方以外の人と結婚することがあつたら、私も呪われていい』

「この時には、俺アもう馬から降りて彼女ば長く抱き締めて、殆ど二十回か十回ばかりのキスも済ませて居た。俺アこう言つた、

「『メリー・アン、俺以外の男と結婚することは無い。若しお前がそう言えば今晚に結婚出来る』

「『全く貴方と言う人は何ば言うか、呆れ返つて言

葉も無い』

「『メリー・アン、若し俺がお前と今夜さ結婚しないとしたら、俺アお前が情けで塩ば付けて呉れても清めの塩では救えない様なひどい人間で罪人と言うことさなる。今日出張つて来たのは結婚ばする為だつちや。俺の新しい服が見え無いか』

「『本当にサム、今日は綺麗な服ば着て居るで無いの。青ずくめで、おまけにそんなぴかぴかのボタン迄付けて居る』

「『俺のチョッキば見て呉れ、メリー・アン、どうだ』

「『あれ、まあ、とても美しい青のピロッドだ』

「『その通りだ、その品だ』と俺は言つた、『それがら半ズボンば見て呉れ、メリー・アン、それにこのブーツ』

「『いやはや』と彼女は答えた、『どんなに魂消たか。サム、何処でこんな素敵な物ば手さ入れるお金ば見付けたの』

「『メリー・アン、お前と同じ位美しい若い女が、父様が嫌みば言つて俺ば追い払つたあの日の夜さ俺の処さやつて来た。真夜中さやつて来て』

「『本当に貴方、サム、恥ずかしいことば言うて無いの』

「『夢の中の話だつちや、メリー・アン。彼女、俺さ前に進めと励ましの言葉は何か言つて呉れた。んで、俺ア次の朝早くから前さ進み、三人の召使いば手さ入れ、それからずつと三人さ働いて貰つて居たのさ』

「『どんな召使いな』と彼女は尋ねた。

「『一人は雁、一人は熊コ、もう一人は蜜蜂だつちや』

「『んもう、サム、私ばからかうことは止めて頂戴』

「『今に判る。只心の準備だけはしておいて呉れ。

何故かと言つと、俺ア今夜こそ埋み火に誓つてお前と結婚する、そして明日の朝早く俺の農家さ連れて帰るがらな』

「『サム、貴方気でも狂つたに違いない様だ』

「『今に判る、信じられる様になる。早速家さ帰つて結婚式の準備は整えて呉れ。ストーヴアル老牧師の家は父様の家から二マイルしか離れて居ないがら、日が沈むまでには連れて帰る。直に判るつて』

「『万が一、サム、貴方の言うことば私が信じたとしても、私には』

「『メリー・アン、俺アその積もりで結婚式の服ば着て居る』

「『んでも、私には若い娘が結婚する時の服は一枚も無いのよ』と彼女。

「『今夜は結婚するからな、メリー・アン』と俺ア言つた、『お前に纏う服が一糸無くてもいい』

「『止めて頂戴、いけ凶々しいと言つのは貴方のことだつちや、サム』彼女、俺の顔ばびしゃりと叩きながら言つた。それがら俺ア彼女の口の処さキスばして、その後二人して歩いて行つたつて、雌馬ば引つ張りながら。

「家さ近づくと、彼女こう言つた、『サ

ム、私ば前に一人で行かせるか、此処の藪さ身ば隠さ

せるか、どつちかにして、貴方一人で家さ入つて頂戴。父様、玄関で煙草ばやりながら新聞ば読んで居るわ』

「『一緒に歩いて入ろう』俺アそりや勿体ばつけて言つた。

「彼女は答えた、『私恐くてならないのよ』

「怖がることは無い、メリー・アン』と俺ア言つた、『万事丁度俺が言つた通りさなることは間違いない。若しストーヴアル牧師か他の牧師ば連れて来て俺達二人ば結び付けることが出来さえすれば、今晚俺達は一緒になれるぞ』

「彼女、突然こう言つたつけ、『ずっと思つて居たんだけど、サム、貴方足が何時もと違う。何故したの。何処か怪我でもしたのでは無いの』

「俺ア答えた、『ポケットの中身の勘定の精算が出来ない為だつちや。いいか、お前と今晚結婚することば考えただけで宙ば飛んで居る様な感じがしたが、気が持ちば抑える為さ石ばポケットさ一杯入れたんだ

ぞ』

「サム、貴方の頭には少しひびが入つて居ると思えてならないわ』

「『さあてなあ』と俺ア言つた、『若しそうなら、ひびは一等美しい陽光と言う目出度い機会ば通して呉れた訳だつちや。今に判る。ひび割れて居るか、あつはつは。父様とけりばつける迄待つて呉れ。父様と差し引き精算ばする積もりで居るから、片がつけば、ひび割れは俺の頭では無くて父様の頭蓋骨さあると云うことが判る筈だ』

「『まさか、サム、まさか私の父様ば殴ると云うことは止めて下さい』彼女は、俺がら躰ば離しながら怯えた風で言つたつけ。

「『怖がらんでいい。だけでも、メリー・アン、若し二人で連携して事さ当たらねば、今晚俺ば亭主さ出来ないことは確かだつちや。結婚は俺がやると誓つたことだ。さあ着いたぞ』

「庭先さ着いたら、雌馬ば引つ張つて中さ入れた。

メリー・アンは走って俺から離れ、家ば避けて行ったつちや。俺ア雌馬ば門柱さ繋いでから、途轍も無く重たい鞍袋ば鞍がら外し、誠にきこちない感じで家さ入った。歩いて行く俺ア、ポケットの中の金の重みでたわわになつて居たつけ。

「さで俺ア中さ入つて行つた。すると其処さ爺様が座つて煙草ばやりながら新聞ば読んで居たつちや。新聞越しに眼鏡で俺ば見た爺様、俺が誰だが判ると、その口は爺様が何時も俺さ話す時見せる例のうぬぼれたにやにや笑いと笑みば浮かべて居た。

「『これは』と爺様、無愛想に言つた、『サム・スナッフルズ、お前か』それがら爺様、俺の新しい服とブーツさ気づいた様で、大声ば張り上げたつちや、『おい、今日は精一杯着飾つて居るではないか。今度はスパータンバグの何処の馬鹿な店の主人ば引つ掛けたのか、サム』

「俺ア落ち着いて言つた、『旦那様、もう暫くしたらその上品な質問さ全部答えるけど、先ずは仕事さ取

り掛からせて戴きます』

「『仕事だと』と爺様は言つた、『んでは、俺さどんな用件があるのか、訊いていいか』

「旦那様、今直ぐ判るつちや。仕事さついて判つて戴いたら氣に入つて貰えるといいですが』

「こつ言つて俺ア足下さ鞍袋ば置いて暢氣に腰掛けた。爺様が俺の凶々しい仕草さ魂消げてじつと見つめて居るのは、俺ア判つて居た。爺様未だ判らなかつたが、俺ア爺様の鯉さ釣り針ば引つ掛けたと思つて居ながら、皆が鱒さよくやる様に爺様さいい氣にさせて、あつちこつち遊ばせたい氣分だつたつちや。

「俺ア言つた、『ホプソン様、旦那様はこの三年の間コロンプス・ミルズ先生さ沢山借金があると言つて無いの、大体三百五十ドル、それも利子付きの借金だ』
「これには爺様、身構えると俺の顔ばじっくりと見てこつ言つた、

「『んで一体お前にそれがどんな関係があると言つたのか』

「俺ア落ち着いてはつきりと続けた、『旦那様はこの農場ば抵当さ入れ、担保さしたつちや』」

「『それがお前に何だと言うのだ』」

「『旦那様、抵当はもう二年も支払いの期限が過ぎてるのです』俺ア言つてやった。

「『だから一体お前にそれが何だと言うのか』爺様、本当に怒鳴り声ば上げたつちや。

「『そりや大したことは無いと思う。年七パーセントで三年の利子が付いた三百五十ドルと言うのは、複利にしないで計算すると、今では四百二十五ドルば少し上回る。まあ、旦那様ほどの大資本があれば大したことは無い数字だ。しかし俺には結構な額だつちや』

「『ところでもう一度尋ねるぞ、おい』と爺様は言つた、『この問題がお前に何の関係があると言うのか』

「『だから今俺が言つて居るでは無いですか。四百二十五ドル位の金の話だ。朝早くから此処さ出かけて来たのは、貴方が抵当ば精算して返済出来ると願つて居たがらだつちや。此れがその書類だ』

「こう言つて俺ア胸のポケットから紙ば出した。

「『んでは、ミルズ先生がお前ば此処さ寄こしたと言うのだな』爺様は言つた、『その金ば取り立てる為さ』

「『それは違う。俺ア自分の用務でやつて来た』

「『判つた』と爺様は言つた、『直ぐ答えてやる。その紙ばミルズ先生の処さ持つて帰つて、俺の方が早い機会に訪ねてこの件ば解決すると言つて呉れ。おい、この答えば持つて帰れ』爺様、かなり勿体ぶつて言つた、『早く俺の前から消えた方が身の為だぞ』

「『旦那様、その丁寧な言葉さ俺アとても感謝して居る』俺ア言つた、『んでも、その答えでは俺ア駄目だ。この紙さ書いてある支払い期限が来た金ば貰いに俺ア来たんで、旦那様、どうしても払つて戴きます。さも無いと弁護士が言う質権の請け戻し権喪失が執行されることになる』

「『もういい。俺が直にミルズ先生の要求さ答える

と伝えておけや』

『旦那様、ご足労の必要は無いです。と言うのも、若し貴方がこの紙の裏を見て譲渡証明ばちよつと読んで呉れたら、コロンプス・ミルズでは無くサム・スナッフルズと話ばつけなくてはならないと言うことが判る筈だ』

「すると爺様、書類ば引つ掴んでひっくり返すと、コロンプス・ミルズ直筆の正規の譲渡証明書ば閲読したつちや。

「それがら旦那様、じつと俺は見つめてがらまるで独り言の様にこう言った、

『これは有益な譲渡証明だ』

『その通りだ』俺ア答えた、『それは有益な、法律的に正式の代物だつちや。権利は全部このサム・スナッフルズのものだと書いてある。弁護士達が言つて居る署名、捺印、交付済み、だつちや』

『んで、お前がどうしてまたこの紙ば手さ入れたのか』と爺様は尋ねた。

「俺ア腹ば立てて居たがら、今度は爺様の鯰さ引つ掛けた俺の釣り針ば大分ぐいと引つ張つてやる決心はつけて居たつちや。んで俺ア言つた、

『旦那様、一体それが貴方さどうだと言うのか。俺達二人の間にあるのは只一つの疑問だけだつちや。つまり、俺サム・スナッフルズさ直ぐ、即金でその金ば綺麗に払う用意があるかと言うことだ』

『否、そんな用意は出来て居ない』

『情け深い寛恕の気持ちで尋ねるけども、どれ位の時間の猶予が必要ですか』

『まだ暫くは掛がるな』爺様、大分むつつりして言つたつけ。それがら再び始めた、

『スナッフルズ君よ、どのようにしてその譲渡証明ば手さ入れたか教えて貰えんか』

「スナッフルズ君と来たつちや。ほほう。

『質問一つ答える必要は』と俺ア言つた、『無い。其処さある書類ば見れば一目瞭然だつちや。いいですか、コロンプス・ミルズは完全な約因』

として譲渡して呉れた。つまり、俺アミルズさ金ば払った訳だ』

「『んだが、お前はどの抵当ば何故買った』

「俺が買物する金ばどうやって手さ入れたか尋ねた方がいい』と俺ア言った。

「『それならそれば尋ねてみようか』爺様は言った。

「『んでは答えます』と俺ア答えた、『貴方の口から出た言葉ばそのまま使うと、一体それが貴方にどうだと言うのか』

「『スナツフルズ君、これは少し失敬ではないか』

「俺ア言つてやった、『礼儀と言うものは礼儀ば知つて居る人間が貰うもんだつちや。旦那様、若し貴方以外の人が貴方がこれまでやった様に俺さ向かつて無礼なことば言つたりしたら、俺アそいつの鼻面ばぶん殴つてやった筈だ。んでも俺ア礼儀知らずの人間にはなりたくない。俺が欲しいのは丁寧な答えだ。この金ば貴方が何時払うのか知りたい』

「『おい、そんなことは今は言えない』

「『実は、「資本」があると言うのに

何故払えないのか不思議に思つて居たつちや。何しろ三年の間利子さえも払つて居ないが。本当のことば言つてはなんだけども、何時もこの田畑は好きだったから、貴方が金ば払えないことば願つて居たつちや。俺アもう直ぐ所帯ば持つがら、だから』

「『お前は一体誰と所帯ば持つ積もりで居るのか』

「『一体それが貴方さ何だと言うのか』俺ア爺様が放つた攻撃さ仕返ししたつちや。んでも俺ア続けた、

「『俺の相手は女と言うことは確かだと考えていい。顎髭ば生やした女房ば俺ア欲しがつたりしない。それに、事情が許せば、天氣が良ければ、それがら牧師が酔つぱらつて居なければ、今夜こそ結婚する積もりだつちや』

「『今夜と言うのか』爺様、どう答えればいいのかよく判らず、こう言つたつちや。

「『そうだ。これ此の通り俺ア結婚式のズボンば穿いて居る。今夜結婚することさなつて居て、出来るだ

け早く女房ば彼女の農場を連れて行きたい。そこで、旦那様、俺ア最初から貴方の此の農場は欲しいと思つて居たが、若し「資本」が手さ入れば、しつかり掴む決心ばしたのつしや。そんな考えで、コロンブス・ミルズがら抵当の譲渡証明ば俺ア買ひ取つたつちや。それにしても、若し貴方が三年経つと言ふのに払えないのなら、金輪際払えない筈だ。若し今日俺の金ば取り戻せないなら、濟まないけれども、弁護士が明日請け戻し権喪失の執行ばしなくてはならない』

「『おい、まさか』 爺様、こう言つと、椅子がら立ち上がり、部屋は行つたり来たりした。『お前は平氣な面ばしてこの俺と俺の家族ば家がら叩き出す積もりではあるまいな』

「『まさか、そんなこと』 俺ア答えた、『旦那様、それはちよつと言ひ回しが違ふ。此の書類ば読めば』 ところで俺ア抵当証書ば拾ひ上げ、ポケットさ仕舞つた、『家と田畑は法律上俺のものだ。昔は貴方のものだったけどな。只それは俺のものさするのに今欠けて居る

のは請け戻し権喪失だけだつちや』

「『んでお前は、はした金の四百ドルの為さ二千ドル以上の価値がある財産は無理矢理売り飛ばす積もりか』

「『旦那様、それなりの値段で売れる筈だ。そう言う此の俺も、若し抵当の二倍かかったとしても、女房の為さ買う積もりで居るんです』

「『お前の女房だと』 爺様は言つた、『一体全体そいつは誰だ。俺の娘つコば好きだと言ふそのようなことば言つておつたの』

「『あれは嘘では無い。んだが貴方は俺と同じく抱いて当然の愛情ば自分の娘つコさ見せなかつた。娘の愛情より金は優先させ、俺さ「資本」ば手さ入れると言つて追い払つた。そうだったな、俺ア貴方の忠告ば入れて、此の通り資本ば手さ入れた訳だ』

「『それにしてもお前は』 と爺様は言つた、『一体何処でそれば手さ入れたのか』

「『そうだな、例の悪魔としつかりとした百

年の契約ば交わして、悪魔さその金ば見つけて貰った』

「『お前の言う通りだったに違いない』爺様は言った、『他のやり方じゃ資本ば手さ入れることが出来る男じゃ無かつたらなら』

「それから爺様は続けた、『それにしてもお前の俺の娘つコへの見せかけの愛情はどうした』

「『あれア見せかけでは無かつた。ところが貴方が力づくで俺達の間ば引き裂いて、勝手放題にあの娘の心ば打ちのめし、俺のも打ちのめした。俺ア連れが無くては生きては行けないから、出来るだけ自分で探して女房ば見つけ無くてはならなかつた。いいですか、俺ア今夜結婚する積もりだ、それにこの農場ば手さ入れると言う、一等の何時までも変わらない誓いば立て居るから、今日こそは金ば工面して、借金ば支払つて下さい。さもないと、明日の朝早く弁護士達が請け戻し権喪失の書類ば持って此処さやって来る』

「『この野郎』爺様は大声ば上げた、『腹の立つことば抜かすか』

「『そんなことは一切無い』俺ア胡瓜の

様に冷静に落ち着いて答えた。

「んでも爺様、頭はぐらぐらと煮えたぎって居る。すつかりとろ火で煮た状態で熱さ浮かされて居だつた。キセルさ煙草ば詰めて火ばつけると、煙出しの方さそれば投げ付けたつちや。それから新聞ば火の中さ押し込むと、片方のブーツで炎の中さ押し潰したつけ。それがら突然俺の方ば振り向くと、こう言つた、

「『そう言うこつた、お前は俺の娘つコば愛して居る風をしていたと言うのに、今ではその娘の父親ば奈落の底さ落とす積もりで居る。それでも、若しお前がメリー・アンば本心に心から、実際に、嘘偽りなく、有益に愛して居たと言うなら、何があつても愛することば止めることは出来なかつた筈だ。ところが、お前は今恐らく全く愛しても居ない他の女と結婚する積もりで居る』

「『この件について貴方の見解は全く道理さ叶つて居る』俺ア答えた、『只ひとつ残念なことは、ずっと

前にメリー・アンは貰いたいと俺が頼んだ時、貴方は今回と同じ見方はされなかったことだ。あの時貴方は彼女の愛情も俺の愛情も大したものとは考えなかった。「資本」以外のことは考えないで、貴方が気に掛けて居ることの為なら、愛情などエリコさ行つちまえと言ふ感じだったつちや。俺アメリー・アンと出来れば結婚したかった、彼女もそうだ。最初二人で暫く丸太小屋で暮らすことも出来た筈だ。と言ふのも、俺ア貧乏と言つても、男に必要な本物の気概はあつたがら、何か手さ入ることもあるかも知れないし、巧くやつて行けたかも知れない。ところが貴方は、自分には「資本」は全く無いのに、この俺の冬のオーバーの様に借金で軀ば包まれて居たと言ふのに、俺さ娘つコはやれないときっぱり言つて、彼女の年の二倍以上上のむつつりした独り者の爺さんさ金で娘つコば売ろうとして居た。資本など糞食らえだ。若しも一人前の男が居たら、それア女さとして最高の資本だ。何故かと言えば、若し一人前の男なら、ふるいの中ば長い時間懸命

に通つて行かなければならぬとしても、働けばすつかり借金は返して抜け出ることが出来る筈だ。資本など糞食らえだつちや。貴方は金の亡者だ、グリムステッド爺さんさ自分の娘ば売つたも同然だ』

『しかし娘は奴と一緒ににはならない』

『それだけ頭のいい少女だつちや』と俺ア言つた、『若し貴方が俺とあの可哀な子供ば判つて呉れて居たら、資本など糞食らえだけれど、俺ア資本ば手さ入れる素質はあつたつちや。貴方のせいで、貴方の子供も貴方も俺も、何もかももうお仕舞いだつちや。兎に角何が何でも今夜結婚しなくてはならない。その後弁護士が手配したら直ぐこの田畑ば俺の女房の為さ手さ入れなくてはならない。俺アこの田畑さ氣に入つて居ながら、埋み火に誓つて誓いば立てたのは十回と言わない』

『可哀想に旦那様はそりやもう汗ば吹き出して居たつた。しかし口数は少なかつたつて。俺の処さやつて来て爺様こう言つた、

「お前がメリー・アンは本当に愛しておればどれだけ良かったか」

「今更」と俺ア言った、『そんなことば話して何になる。貴方が自分の娘つコば愛しておればどれだけ良かったか』

「その内爺様泣き始めた。それば見た俺ア、足下の鞍袋ば蹴ってひっくり返した。すると、メキシコのペソ銀貨が一ブツシエル程転がり出て来たつちや。すると、爺様、何と飛び上がって全身は目さして俺とドルばじつと見つめたつちや。」

「『金じゃねえか』」

「『そうだ』と俺ア答えた、『俺の「資本」で数十万ドル程ある』俺ア数字のことはくどくど言わなかつた。」

「すると爺様俺の方ば向いてこう言った、『サム・スナツフルズ、お前は実に不思議な男だつちや。俺にはお前と言う人間が判らねえ。一体全体お前は今まで何処さ行って居た。今まで何ばして居た。此れだけ

沢山資本は何処で手さ入れた』

「俺ア只笑つてドアの処さ行き、メリー・アンば呼んだ。彼女、直ぐやって来た。それまで様子ば窺いながら待つて居たのだと思う。」

「俺ア言った、『メリー・アン、其処さ金がある。それば拾つて鞍袋さ戻して呉れ』」

「それがら俺ア、爺様の方さ向き直つて言った、『其処さ丁度一ブツシエル分のペソ銀貨がある。途方も無く重たい。俺の年寄りの雌馬の肋骨さは是非訊いて欲しいけども、あれも此の俺と此の金の重さの為さ随分押し潰されて居た。この俺にしたつて、大層な重装備だからな。さでと、旦那様のお許しが貰えれば、身軽さなりたいたいですが』」

「こう言つて俺ア、右のポケットから五ドル金貨の入った小さな袋ば引つ張り出して、テーブルの上さ全部吐き出したつちや。それがら左のポケット、それがらコートの脇ポケット、それがら腰下のポケットば空にすると、テーブルの上さぴかぴか光る金貨ば広げ

て見せた。

「メリー・アンはそれア魂消て部屋から走って出て行った。するとかかあ殿が出て来た。爺様は彼女の姿ば見つけると、肩ば引つ張ってこう言った、

『おい、其処さあるものば見ろ』

「すると、この可哀想で、世間体ばかり気にする、ならず者の罰当たりの年寄りのかかあ殿、金貨ばじつと見ると、俺の方さ向き直り、両腕ば俺の首さ投げる様に巻き付けてからこう言った、

『メリー・アンには貴方しか居ないと私何時も言うて居たんだ』

「本当に気味悪い女だつちや。

「んで、俺ア二人さ金ば心行く迄見せ、心行く迄魂消させて置いてながら、俺アメリー・アンとかかあ殿ば部屋の外さ出て行かせた。

「爺様はと言うと、肘掛け椅子さ再び座り込んで居たが、何ば言っつていいやら、何ばしていいやらよく判らず、随分腹ばすかせた猫が鼠ば見る時の様な鋭い

視線で俺の一举一動ば見守って居た。

「ペソ金貨は全部鞍袋さ片づけたけど、爺様それば目さして居たし、金の入った小さい袋も皆テーブルの上さ載って居た。五ドル金貨と二ドル五十セント金貨が、まるで再び這い出て来たいと思つて居るかの様に小さい袋の口から顔ば出して居た。

「一方、爺様は川のパーチば狙って居るみさごの様な貪欲な目つきで眺めて居る。すると、すすり泣きとも泣き声とも話しかけて居る声とも判らぬ声でこう言った、

「『まあ何だ、サム・スナツフルズ、若しお前が俺の可愛いメリー・アンば本気で好きになつて居たら、他の女と所帯ば持つと云うことも無かつた筈だ』

「その時の俺ば見せたかつたな。俺ア十六フィートの背丈でチェストナツト・オークの様に丈夫な気持ちだつたつちや。俺ア爺様の処さ歩いて行って、親指と人差し指で静かに爺様のコートの襟ば掴んでから、こう言つた、『旦那様、ちよつと立つ』

て呉れ』

「んで爺様腰ば上げた。

「それから俺ア壁さ掛かつて居る大きな鏡の処さ爺様ば連れて行くと、爺様さこう言った、『済まないけども、見て下さい』

「すると爺様はこう言った、『俺ア見て居る』

「んで俺ア言った、『何が見えますか』

「爺様は答えた、『お前と俺が見える』

「俺ア言った、『もう一度見て下さい、じっくりと目ば注げば何が見えるか言つて下さい』

「だから』と爺様、『俺ア目ば注いで居る』

「んで俺ア言った、『目ばじっくりと注いで何が見えますか。それが俺の質問だつちや』

「すると爺様曰く、『俺の隣さ、これまで見たことのない一等の美男子が見える』

「『そうだ』俺ア言った、『それが正確な目の注ぎ方だつちや。それにしても』と俺ア尋ねた、『貴方自身について何が見えるか』

「それは、はつきりと言えない』

「よく見て下さい』俺ア言った、『目ば注いで呉れ』

「爺様曰く、『そんなこと尋ねないで呉れ』

「駄目だ』と俺ア言った、『そう言うことでは駄目だ。もう一度言う、じっくりと鏡ば覗いて下さい、俺

アこの通り「資本」ば手さ入れたつちや、俺の様な素晴らしい若い美男子の義理の父親さなる権利がある様な男かどうか、自分の心さ尋ねて下さい』

「すると爺様、その状況の滑稽さの為さ笑い出し、こう言った、『そうだ、サム・スナツフルズ、今度は俺の方がぐうの音も出ない。お前は俺が考えて居た男とは別人だつちや。しかし、サム、若し俺が鏡の前さ連れて行つて嫌みば言つて追い払わなかつたら、「資本」ば手さ入れる為さ精出すことは無かつたらう、どうだ』

「『そんなことは判らない』俺ア答えた、『ある道ば行つた方がいい時でも、状況さ依つて他の道ば行くこともあるつちや。だけど、ライオンの様に

激しい愛は女さ見せる気概のある、そして、バッファローの様にとでかい気持ちで敵と戦う気概のある男と会った時には、誠の気概があると言うことになる。俺が若いことも、貧乏なことも、貴方は判って居た、生まれ付きの才能が無ければ猟師と言う仕事がひどく儲けの少ない仕事だと言うことも貴方は知って居た。確かに俺の仕事は順調じゃ無かった、だけど、それは頭がメリー・アンのこと一杯だったからだ。それ位計算を入れて大目に見て呉れてもよかった。ところが貴方、俺ばどこまでも馬鹿にしたが俺ア怒った。ただ俺ア貴方の所為で俺とメリー・アンが悲嘆さ暮れることには絶対にならないと心さ誓った。貴方は勝手放題抜かしながら、俺ア仕返ししようとしただけだつちや。さて、貴方は鏡さ目は注いで見たな、若し「資本」ば手さ入れた俺の様な立派な男にお似合いの義理の父親さなれると本当に考えて居るなら、はつきり言つて呉れ。そうすればメリー・アンは呼んで契約ば取り決める。だから直ぐはつきり答えて

呉れないと困る、なにしろ今夜結婚式ば挙げることさなつて居るからな。埋み火さ誓つて誓いば立てたからな』

『今夜と言うのか』爺様は言つた。

『「資本」ば見て呉れ』と俺ア言つてがら、テーブルの上の金と鞍袋の銀さ指ば向けた。

『それにしても、サム、突然そんなことは』爺様は言つた、『言つても、準備期間が要る』

『俺ア言つた、『日那樣、』「資本」ば見て呉れ。準備もへつたくれも無い』

『だけどよ』爺様は言つた、『客ば招く時間も無いぞ』

『「客もへつたくれも無い』俺ア言つた、『結婚ばする晩さお客が居ないと困ると俺ア思つて居ない。道理の判る男だつたら、結婚相手が此処さ居たらそれで十分だつちや』

『「だけど、サム』と爺様は言つた、『今晚迄に晩飯ば準備することは無理だつちや』

「俺ア言つた、『いいですか、旦那様、結婚の夜さ何が要らないかと言うとそれは晩飯だ』」

「すると言うとう爺様、婆様のかかあ様のことさついでなんだかんだ言つたつけ。

「俺ア言つた、『かかあ様はここさ呼んで「資本」ば見せたらいい』」

「んで爺様、かかあ様は呼び入れと、後がらメリー・アンが入つて来た。すると言うとう皆でなんだかんだと口ごもつて話して居たけども、かかあ様がこう言つた、

「サム、私にはこの娘っこしか居ない、だから結婚式は盛大なものさしなくてはならない。見栄ば張る必要があるのっしや。私たちには凄いな数の友達や知り合いが居る、だから連中は呼ばないと礼儀知らずと言うことさなるし、なにしろ連中が許さない。家の名譽と世間体の為さ派手なことやらなくてはならない』」

「俺ア言つた、『いいか、かかあ様。俺ア埋み火に誓つて、メリー・アンと今夜結婚すると、そりや大

きな誓いは立てたのだったしや、そんな

誓いは俺ア破る事は出来ない。メリー・アン』と俺ア言つた、『お前はそんな大きな誓いは破つて欲しくないだろ』

「すると彼女、躰はぶるぶる震わせて、こう言つた、『駄目、サム、絶対駄目だ』」

「『かかあ様、聞こえただろ』俺ア言つた、『埋み火に誓つて俺達今夜結婚する。俺達が一緒さなるのにストーヴァル老牧師以外の客は必要無い。メリー・アンと俺は明日の朝夜明け前にここば出る、本当だ、それから俺の農場さ行く。其処で彼女さ家財道具の据え付けばして貰わなくてはならない。これが済んだら、どうぞ郡中の人間さ触れ回つて、振る舞えるだけの晩飯ば食べさせればいい。さあ急いで呉れ』と俺は言つた、『出来るだけ早く準備さ取り掛かつて下さい。俺ア今直ぐストーヴァル牧師の処へ馬ば飛ばして行つて来る。半時間で晩飯さ戻るっしや。メリー・アン、あの金と銀ば集めて袋さ仕舞つて置いて呉れ。あれは俺達

の「資本」だからな。それがら貴方、旦那様、其処さある貴方の農場の抵当証書はメリー・アンからの贈り物だっちゃ。牧師が俺達二人ば縁組みして、俺がメリー・アンばスナツフルズ夫人、つまりメリー・アン・スナツフルズ夫人とかなんとか、スナツフルズ夫人とか呼べるようになったら、直ぐその証書は好きな様にして貰つていい』

「俺ア此の時其処さ居た皆さ高飛車に命令ば下し、爺様にはその姿と、少なくとも七フィートの上背のある俺が爺様の隣さ立って居る姿ば見せたから、思惑通り俺の仕事は行つたつちや。父親もかかあ様もそれ以上何も言うことは無かつたから、俺ア雌馬さ飛び乗ってストーヴアル老牧師の処さ飛んで行つた」

「俺ア言つた、『牧師様、今夜縁組みがあります、貴方様さしつかり結んで欲しい。どんな意味か判つていなさいませぬ。ホプソン様の処さ来て欲しい。俺と爺様の娘つこのメリー・アンは、今夜債権者の家は出る積もりで居る、だから、俺達が支払いは済ませて

飛び立つ様に、そして法とモーゼと預言者さ従つて貸借は全て無くす様に取り計らつて欲しい。牧師様、俺の奢りだから、馬で出かけて来てても損はすることは無い。金で払うから』

「んで牧師様は日暮れ迄に来ると約束した。実際やつて来た。かかあ様は少し晩飯ば準備して居て、それだけ短い時間出来る最大限のことばやつて居た。鹿肉のハムは随分良かったと思う、なにしろストーヴアル牧師はそればたらふく食べたからな。若し俺の雁の四羽ば手早く料理して居なかつたら、そんなら悪魔は光の天使と云うことになる、サム・スナツフルズは罪人も同然と云うことになる。桃や蜂蜜は数さ入れたら、罎巻き瓶は幾らでもあつたつちや。ストーヴアル牧師はそりや大食家で、俺ア何時迄経つても終わらないと思ひ始めた。だけどもやつと牧師は口ば拭くと、五杯目のコーヒーば飲み干して、桃と蜂蜜の強い酒と一緒に喉さ流し込むと、再び口ば拭いたつちや。それがら、祈祷書と賛美歌集と聖書、全部で三冊あ

ったけども、これは引つ張り出すと、三回咳払いして
から結婚の聖句ば探し始め、賛美歌第百番ば読み上げ
始めた。

「『諸人こぞりて、ひとつにならん・・・』」

「『違うぞ、牧師様』俺ア言った、『諸人では無い。』

今夜結ばれるのはメリー・アンと俺だけだ』

「丁度そのとき、牧師様が答える前に、誰が突然顔
ば見せたかと言うと、独り者のグリムステッド爺さん
だつちや。辺りばぐるつと見た爺さん、中でも俺と牧
師様さ目ば向けたけど、その目はこんなことば言つて
居たつけ、

「『一体全体此処で何ばして居るのか』

「俺ア旦那様が不安で居ることは判った。しかし何
も知らないストーリーヴァル老牧師様、二人さうだうだ
説明したり無駄口ば叩いたりさせて置くことは無かつ
た。腰ば上げた牧師様、垂直に立つと、それは肉切り
大包丁の様ないかめしい顔ばしてこう言つたつけ、

「『婚姻と言う神聖なる絆で結ばれんとして居る二

人、その二人ば私の前さ立たせて呉れ』

二一六

「すると言うくと、驚くでは無いか、牧師様がこう言
つた時、あの鼻つまみ者の独り者が何ばしたと思う。
野郎コ春の年取つた牡鹿の様に堂々として立ち上がる
と、俺のメリー・アンの方さ行くでは無いか。しかし
野郎コの手さ負える相手では俺ア無いし、元氣では負
けて居なかつた。俺ア二人の間さ立ちはだかり、
爺さんのコートの際ば親指と人差し指で捕まえると、
訳の判らない内に大きな鏡の前さ連れて行き、俺アこ
う言つた、

「『覗いて見ろ』

「『一体』と野郎コは言つた、『何ば見ろと言うのか』

「『じっくりと見ろ』

「俺ア見て居る』野郎コは言つた。『おい、何でそ
んなことば言う』

「俺ア言つた、『よく目ば注いで見ろ。お前が見え
るか。目ば注いで見ろ』

「『だが俺アそうして居る』

「『んなら』と俺ア言った、『自分の胸さ訊いてみる、お前が俺のメリー・アンと結婚ばする様な顔の男であるかどうか』」

「すると爺様突然笑い出したつけ。爺様我慢が出来なかつた。

「『資本だっちゃ』と爺様は言った。

「『その通りだ、資本だっちゃ』と俺ア言った、『さで牧師様、二人揃つた。しっかりと繋いで呉れればいいが、さあ早くくっ付けて呉れ。何故かと言うと、野郎コのような年老いた独り者が周りさうろろして居る時には、茶碗は口さ持つて行く間にどれだけ失敗があるか判つたものではないが』」

「『この若い婦人は引き渡すのは誰だ』と牧師様が尋ねた。すると旦那様、立ち上がつて言われたことばやつた。俺ア指輪ば準備したが、牧師様が仕事は全部やり終える前にグリムステッド爺さんは逃げて帰つた。

「爺さん、自分が用なしで今回のことさ関係が無い

ことばなかなか理解出来なかつた。しかし爺さんと旦那様は後で大きな口喧嘩ばやり、若し俺が其処さ居合わせ無かつたら、野郎コ旦那様は殴つて居たかも知れない。やれた筈だ。しかし俺アある日のこと野郎コさ向かつて帽子ば斜めさ被つてインジャンの言葉でこう言つたつけ、

「『ヤオウ』すると野郎コ俺の言うことが判らない。それでも俺が目線でトマホークば投げ付けてやると、野郎コ尻尾ば巻いて逃げたつけ。年齢ば益々取つて居るあの野郎コは、何時も益々地面さ向かつて伸びて居るのが判るつちや。

「判事さん、此は全部十三年前の話だ。俺とメリー・アンは素晴らしく仲良くやつて行つた、それに資本には終わりが無い。金は牛の様に増えて行くし、メリー・アンはシジュウカラの様に幸せさする為、俺ア時折袋ばぎゅつと絞る必要があるだけだつちや。結婚十三年目の俺ば見て呉れ。判事さん、余りくたびれて居ないのは判る筈だ。メリー・アンもく

たびれては居ないことも本当だ。只、三十六人も子供が出来たけどな」

「何だつて！」と俺は叫んだ、「十三年で三十六人の子供だと！」

法螺吹きが大声を上げた。

「見事だ、シャープ！その調子だ。大法螺吹けとるぞ。この最後の一矢で、お前が土曜の夜の法螺吹きキヤンプさお似合いの本物の小悪党と言うことが判って貰えるぞ」

「その通りだ。いいか、メリー・アンは未だくたばつては居ない。しかし自分で計算ばすれば判ることだつちや。さあ、判事さん、よく聞いて下さい。自分で計算して呉れ。先ず三人の女の子が生まれたつて。そうそうだ。さあ此れで三人。次に俺達には男の子が六人生まれたつちや、四年間毎年一人ずつ、それから五年目メリー・アンは二の目の賽ば投げたがら、これで六人の男の子と言う訳だ。さで三人の女の子の後さ六人の男の子ば書き付けると、若しそれが三十六人さな

らなければ、フロリダ中に蛇は一匹も居ないことさなる。

「んでは、皆さん」とサムは言った、「一緒に酒ば飲んでメリー・アン・スナツフルズと魚みたいに跳ねて居る三十六人の子供の健康に乾杯と行こう。判事さん、それがら他の皆さん方、お会い出来てよかつた。俺の家は皆元気にやつて居る。んでも、時折俺ア旦那様の襟さ親指と人差し指ば置いて大きな鏡の中の顔ば見せ、じつくりと目ば注いで見ると言うことにして居る。何故かと言うと、旦那様は俺の『資本』ば山分けしたくてうずうずして居るがらな」

注

注28 ノースカロライナ州西部の都市。

注29 ニコラス・ビドル（一七八六―一八四四）。第二合衆国銀行の第三代総裁で、この中央銀行は一八三六年ジャクソンの特許更新拒否によって営業停止となる。

注30 ベントンはトーマス・ハート・ベントン（一七八二―一八五八）で、国立銀行に反対したジャクソンを支持した。金貨を導入した彼の地口からミント・ドロップが生まれた。この後暫くの間金貨はベントンのミント・ドロップと呼ばれた。ベントニアン・シャイナーとも言う。

注31 原文では「信用する」で、これは「利子」のマラプロピズム。以下、法律と商取引に関する用語についてのスナッフズとホプソンの言葉の誤用には、シムズの資本への批判が見られる。

注32 「モーター」は「白、白砲」の意だが、ここでは「死すべき人間」の意に取った。「神聖な」には反語的な「ひどい」と「穴の開いた」の意が含まれる。「ピーター

（原意は「岩」と清めの塩」と「硝石」をかけた表現か。訳では「ピーター」を「ピテイ」の訛りと解釈した。

注33 原文では「つま先立って」で、これは「この上なく」のマラプロピズム。

注34 原文では「フォー・クロージャ」で、これは「抵当請け戻し権喪失」のマラプロピズム。「最後通告」（四回の討論終結）と「四方から取り囲む」等を使った表現か。

注35 原文では「有益な」で、これは「真正の、本物の」のマラプロピズム。「十分な資格を持った」「肉付きのよい」の意の「ボニー」と、「飼い葉」「材料」の意の「フォダー」から。

注36 「約因」とは捺印証書によらない単純契約を法的に有効にするに足るだけのもので、通例その約束と交換に与えられる相当額のもの。

注 37 「数字」は「桁、位」の意も含む。スナツフルズは、女

の子三人と男の子六人で計二十六人の子持ちである。

注 38 「ハーフ・イーグル」と呼ばれる五ドル金貨。

注 39 原文では「つまらぬことに極端に批判的」で、「偽善者の」の意を含む。

注 40 「クォーター・イーグル」と呼ばれる二ドル五十セント金貨。

注 41 スズキの類の淡水魚。パーチを狙うホプソンは「みさご」で、スナツフルズが足蹴にするのは「五ドル金貨」「二ドル五十セント金貨」など、合衆国の国章であり十ドル金貨を表す「鷲」である。

注 42 原文では「債権者をまいてずらかる」。「結婚する」の意

でここで使用されているが、本来鳥が獵師から逃げることを意味する。

注 43 原文では「利益」で、これは「預言者」のマラプロピズム。「法」に関しても「神の法」と「法律」の間に差異がない。